



Title	中学校における英語教育の実態調査(3) : 沖縄県A中学校における事例から
Author(s)	大城, 賢; 平良, たみ子; 宮里, 征吾; 浜田, 麻由子
Citation	琉球大学教育学部紀要 = Bulletin of Faculty of Education University of the Ryukyus(87): 85-94
Issue Date	2015-09
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/32314
Rights	

中学校における英語教育の実態調査(Ⅲ) ～沖縄県 A 中学校における事例から～

大城賢*, 平良たみ子**, 宮里征吾***, 浜田麻由子****

A Study of Junior High School English Education Based on the Analysis of Eiken English Proficiency Test and the Questionnaire (III)

Ken OSHIRO*, Tamiko TAIRA**, Seigo MIYAZATO***, Mayuko HAMADA****

I 調査の目的

琉球大学教育学部は沖縄県の委託を受けて2013年度より「学力向上先進地域育成事業」を展開している。これは、沖縄県の4つの地域を指定し、学力向上に向けて、学校、教育委員会、大学が連携して取り組むプロジェクトである。筆者は初年度よりこのプロジェクトに関わり、現在2つの指定校において英語の授業改善に取り組んでいる。

授業を改善するには、実態を把握する必要がある。そこで、筆者らは2014年1月に指定校であるA中学校において英語教育の実態調査¹を行った。A中学校は沖縄県の都市部に所在する学校である。調査時点(2014年1月)では1学年7クラス、2学年6クラス、3学年7クラスで全校生徒は745名であった。部活動も盛んな学校である。

調査の結果、以下のことが明らかになった。

- ・英検3級合格レベルにある中学3年生は24%であった。
- ・3年生には、2極化の傾向がみられた。
- ・通塾生と非通塾生を比べてみると、両グループに統計的な有意差は無かった。

- ・部活動参加者と部活動不参加の間には統計的な有意差はなかった。
- ・予習・復習・宿題と成績との相関は予想したほど高いものではなかった。予習・復習・宿題はしているものの、それが直接成績につながらないグループが存在することがわかった。
- ・「(英語が)好き・どちらかという好き」を合わせた生徒の割合は3学年とも6割を超えていた。
- ・授業の理解度について、70%以上理解しているとした生徒は1年生で33%、2年生で33%、3年生で46%であった。
- ・態度面とスコアの関係は3学年を通して正の相関があった。英語学習にポジティブな態度であればあるほど英語の成績は高いことが分かった。

今回の調査は1年後の生徒の変容をみるために行った。ただし、諸般の事情から英語能力判定テスト及びアンケートは、各学年から無作為抽出の2クラスを選び実施した。

II 調査の概要

生徒の英語力を調査するために、英語能力判定テスト(D)を実施した。また、生徒の学習に対する態度面の調査には筆者が作成したアンケートを実施した。

(1) 参加者

調査参加者は以下のとおりである。

1年生2クラス64名

* 琉球大学教育学部

** 浦添市立浦添中学校

*** 沖縄県渡嘉敷村立渡嘉敷中学校

**** 公益財団法人日本英語検定協会

¹ この結果は「中学校における英語教育の実態調査(Ⅰ): 沖縄県A中学校における事例から」琉球大学教育学部紀要、2014年2月にまとめている。

2 年生 2 クラス 64 名

3 年生 2 クラス 67 名

テストは受けているがアンケートが未提出の生徒、逆にアンケートは提出しているがテストは受けていない生徒 5 名は欠損データとして分析対象から除外した。

(2) 使用したテスト

使用した英語能力判定テスト (Test D) は英検 3 級～5 級の問題からできている。受検者の英語力を 5 級から 3 級の範囲で調査することができる。筆記 50 問 (35 分)、リスニング 30 問 (15 分) から構成されており、満点スコアは 460 点である。筆記は「語彙・熟語・文法」、「英文構成」、「読解」の 3 つの分野からできている。今回のテストは前回のテストとは内容が異なる別のセットを使用した。

(3) 使用したアンケート

アンケートの内容は前回同様以下の 13 項目からできている。項目 11～13 以外は全て①強く思う、②思う、③思わない、④全く思わない、の 4 件選択法をとっている。アンケート項目の 1～3 までが英語に対する好悪、4 が英語理解に対する自己評価、5～7 が国際社会における英語の果たす役割についての認識、8～10 が家庭学習の状況、11 が通塾の状況、12 が部活動の状況である。

(4) 調査時期

2015 年 1 月に各学年より無作為に抽出した 2 クラスにおいて、テスト及びアンケートを実施した。

III 結果と考察

(1) 前年度との成績比較

A 中学校の平成 25 年度と平成 26 年度の成績 (受検者の平均点) を比較したのが以下の表である。

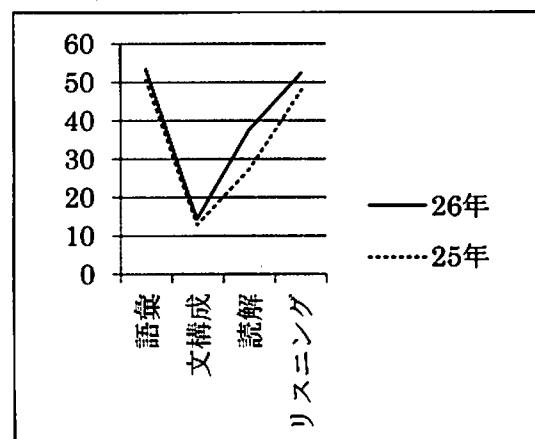
25 年度	総合	語彙	文章	読解	リスニング
1 年	137.8	50.3	12.4	27.3	47.8
2 年	183.3	64.4	28.8	29	61
3 年	257	74.5	53.6	59.2	69.7

26 年度	総合	語彙	文章	読解	リスニング
1 年	204.2	53	13.8	37.4	52.1
2 年	248.8	67.7	29.7	48.9	62.1
3 年	304.4	82.2	53.7	62.6	73.8

25 年度と 26 年度を比べると、1 年生の語彙分野を除いて全ての分野と総合点において平成 26 年度が上回っている。1 年生が 66.4 点、2 年生が 65.5 点、3 年生が 47.4 点と大きな差がある。平成 25 年度と平成 26 年度はサンプル数が異なるため、統計的な有意差を確認することはできないが²、全体的に成績が向上したということは言えそうである。

学年ごとに平成 25 年度と平成 26 年度の変容をグラフで示すと以下のようになる。

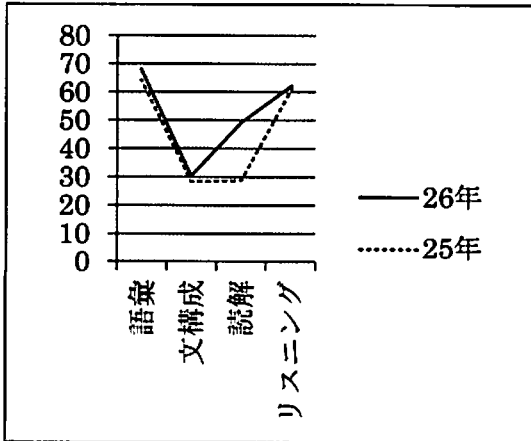
< 1 年生 >



語彙と文構成においては差がないが、読解とリスニングにおいては差がある。

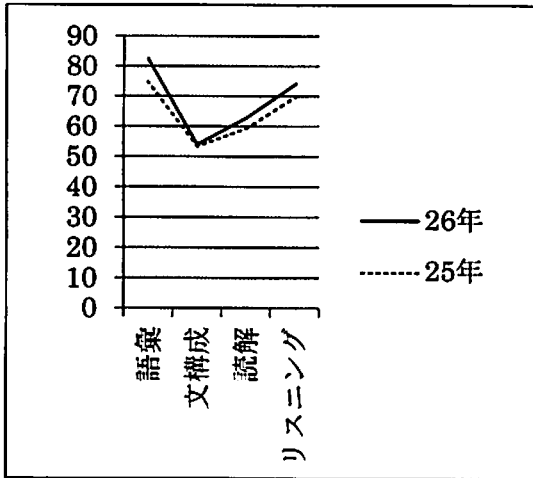
² (検定ではサンプル数の偏りをできるだけ抑える必要があり、目安としては 1.5 倍程度 (1 グループが 50 名なら、もう 1 つは 75 名程度まで) の範囲が妥当である。今回のサンプル数は 3 倍の開きがある。

< 2 年生 >



読解、文構成、リスニングには差がないが、読解においては20点の開きがある。読解におけるこの差は、前年度の指導に問題があった可能性がある。

< 3 年生 >



3 学年においては文構成においては差がないが、語彙、読解、リスニングにおいては差がある。この学年は、前年度（2 年生の時）には読解において大きな落ち込みが見られた学年である。しかし、3 年になってその落ち込みが解消されている。その理由については後述する。

(2) 平成 26 年度の成績の状況

平成26年度の3学年の基本データを以下に示す。

基本データから明らかなように、学年を追うごとに平均点は順調に向上している。

標準偏差は学年が上がるごとに数値が大きくなっていく（成績のバラツキ度合いが大きくなっていく）。これは一般的にも見られる傾向である。

<平成 26 年度 3 学年基本データ>

	1 年	2 年	3 年
平均	204.1875	252.746	304.4328
標準誤差	7.112227	8.473233	9.643445
中央値 (メジアン)	189	235	282
最頻値 (モード)	232	231	281
標準偏差	56.89781	67.2542	78.935
分散	3237.361	4523.128	6230.734
尖度	2.914246	0.147845	-0.57448
歪度	1.227951	0.163247	0.313955
範囲	325	330	317
最小	95	85	140
最大	420	415	457
合計	13068	15923	20397
標本数	64	63	67
信頼区間 (95.0%)	14.21265	16.93775	19.25376

3 学年の度数分布を示したのが以下の表とグラフである。学年が上がるごとに、成績上位者の割合が大きくなっていく。

特筆すべきは3 学年の度数グラフである。平成 25 年度は3 学年に二極化の傾向が見られたが、平成 26 年度はその傾向が見られず、正規分布に近い形となっている。ちなみに、3 年生の英検 3 級レベル以上の割合は 28% となっている。前年度（平成 25 年度）が 24% であるので、若干増えている。しかし、前述したように、母集団が異なる。

るため、統計的に有意差があるかどうかは確認できない。2011年度の文部科学省の調査³によると、全国の公立中学校3年生のうち3級レベル以上の実力があると教員が判断した生徒は26%である。A中学校は、全国平均を若干上回っている。

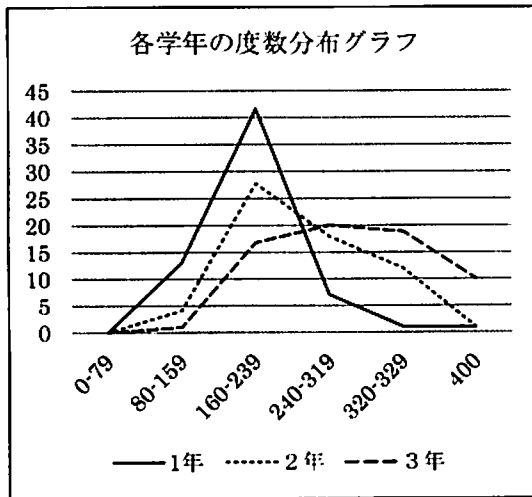
<度数分布>

A中学校1年生						
得点幅	0 79	80 159	160 239	240 319	320 399	400 460
人数	0	13	42	7	1	1

A中学校2年生						
得点幅	0 79	80 159	160 239	240 319	320 399	400 460
人数	0	4	28	18	12	1

A中学校3年生						
得点幅	0 79	80 159	160 239	240 319	320 399	400 460
人数	0	1	17	20	19	10

<3学年の度数分布グラフ>

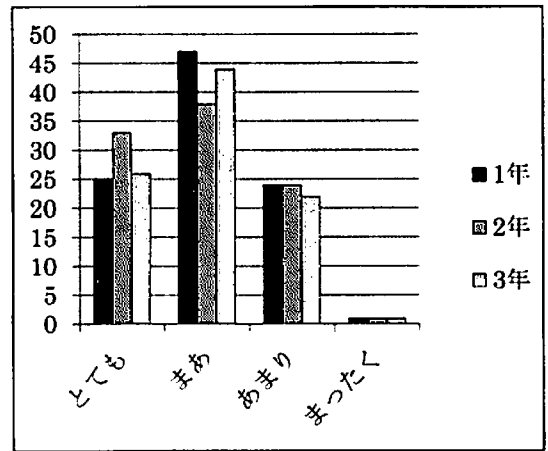


(2) 前年度とのアンケートの比較

アンケート項目をいくつかピックアップして検討してみる。

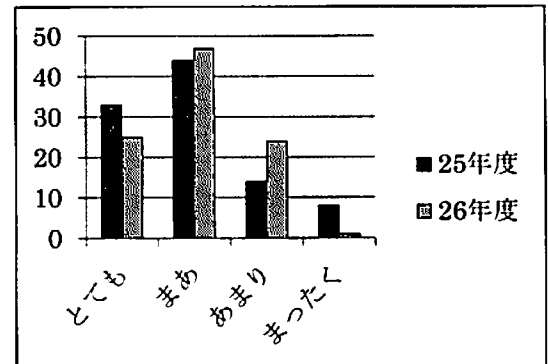
「授業はどの程度理解していますか」という質問に対して、平成26年度の1～3学年の結果を以下に示す。「とても理解している」と「まあ理解している」を合わせると1年生が72%、2年生が71%、3年生が70%と、どの学年も大差がない。授業を理解している生徒が大半であることが分かる。

<授業の理解度>



授業の理解度について、平成25年度と平成26年度を学年別に比べると以下のようにになっている。1年生については、「とても理解している」「まあ理解している」を合わせると平成25年度が77%で26年度が72%である。26年度は若干下がってはいるが大きく下がっている訳ではない。

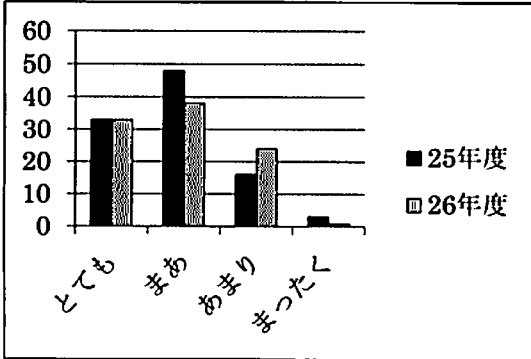
<1年生>



³ 共同通信2012年1月31日(ネット版)

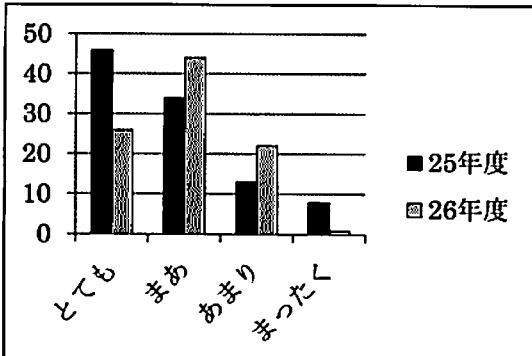
2年生については、「とても理解している」「まあ理解している」を合わせると平成25年度が81%で26年度が71%である。26年度は若干下がってはいる。成績を比べると平成26年度のほうが平均点で65.5点も上回っている。テストの内容に比べると授業のほうが難しいと感じる生徒が多い可能性がある。

< 2年生 >

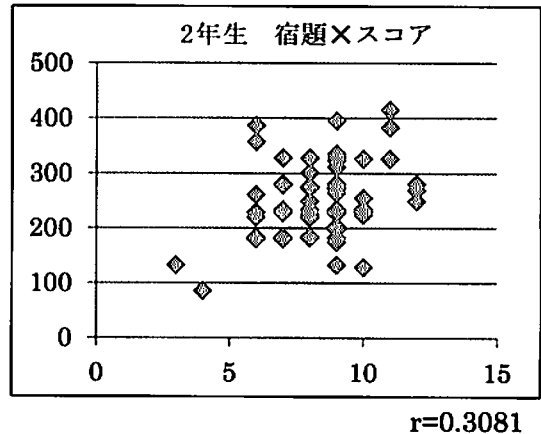
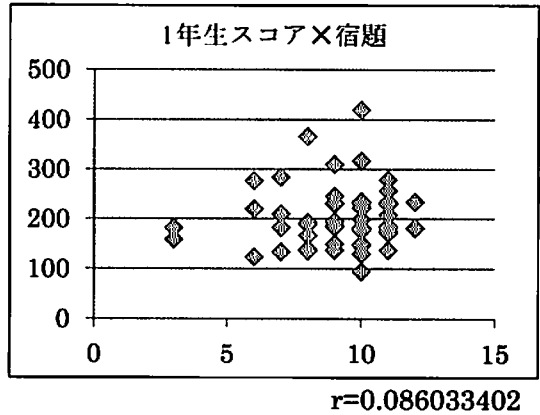


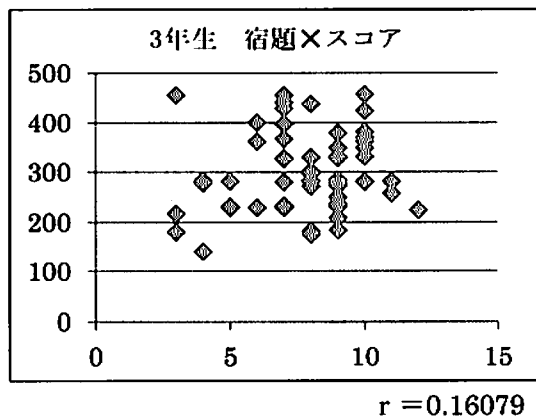
3年生については、「とても理解している」「まあ理解している」を合わせると平成25年度が80%で26年度が70%である。成績を比べると平成26年度のほうが平均点で47.4点も上回っているが、生徒の自己評価は低い結果となっている。しかも、「とても理解している」と答えた生徒は平成25年度が46%で平成26年度は26%と大きな開きがある。このような結果になった理由は、2年生と同様で、「授業を理解している」ということと、実際に受けたテストの内容が異なっていた可能性がある。別の言い方をすると、テストに比べると、実際の授業は難しかった可能性がある。

< 3年生 >



家庭学習とスコアの相関について検討する。家庭学習に関する質問項目（予習はしていますか、復習はしていますか、宿題はしていますか）に対して、「よくする」を4点、「時々する」を3点、「たまにする」を2点、「まったくしない」を1点として点数化して学年毎に家庭学習とスコアとの関係をピアソンの相関係数で調べた。結果は1年生が $r=0.0860$ であり、無相関の検定は $p<0.05$ で有意であった。以上のことから、この2つには、ほとんど相関がないことがわかった。2年生では $r=0.30813$ で、弱い相関があることがわかった。3年生では $r=0.16079$ で、ほとんど相関がないことがわかった。前年度（平成25年度）の結果もほぼ同様であった。家庭学習の結果がスコアに繋がっていない可能性が高い。





IV 多読指導の実践

前節まで、アンケートや英語能力判定テストの結果などにに基づき、A中学校の英語教育の実態を探ってきた。このような実態は、どのような授業を行った結果なのか、ということを探るのも、実態を理解することに役立つ。前述したように、A中学校では前年度の2年生（平成26年度の3年生）の読解力に課題があった。しかし、今年度（平成26年度）の3年生は、読解力における課題をクリアしている。その理由は平成26年度の3年生に導入した多読指導にあるのではないかと思われる。そこで、本節では、平成26年度に導入を始めた3学年を対象とした多読指導について検討する。

A中学校では読解力に課題があることから、平成26年度の7月から、3学年の全クラスにおいて、多読指導を行った。方法は以下のとおりである。

- (1) 週1回の授業の20分間を多読の時間とする。
- (2) 生徒自身で自分に合った本を選択させ、20分間は何冊読んでもよいこととする。
- (3) 読み終わったら、記録用紙に、日付・本のタイトルとレベル・単語数とその累計・感想・気に入ったフレーズなどを記入する。

教材は以下のものを使用した。

- (1) Oxford Reading Tree Stage 1-7
- (2) Foundation Reading Library Level 1-6
- (3) Curious George

指導の留意点としては以下のことをあげている。

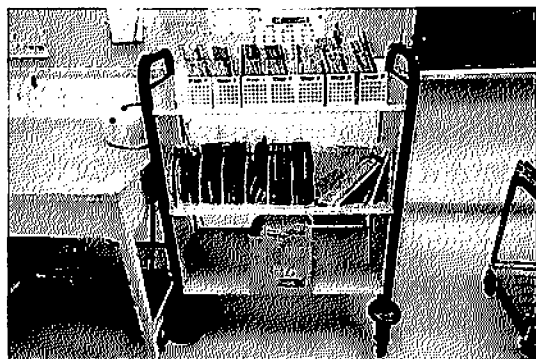
- (1) 多読3原則のもと、意味内容に意識を向け、楽しみながら読み進めていくよう指導する。

- (2) 読書記録は、読む時間を確保し、なるべく短く記録させる。毎週多読終了時に提出させ、教師は記録内容を点検し、翌週返却する。

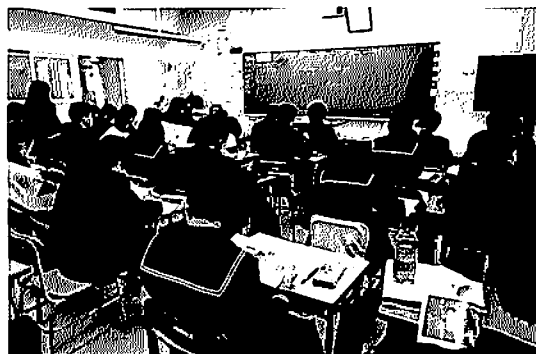
酒井・神田によると、多読指導の原則は以下のようなものである。¹

1. 辞書は引かない
簡単すぎるくらいのレベルから始める。
2. 分からないところは飛ばす
知らない単語、分からない部分は文脈から推測する。
3. つまらなくなったらやめる
短期間で効果を求めず、続けることを第一にする。読書記録を付けて達成感を重ねる。

A中学校では、「感想・メモを書かせる」や「気に入ったフレーズを書かせる」などを行っているが、それ以外は、酒井・神田の原則にしたがって1年間にわたって多読指導が行われた。



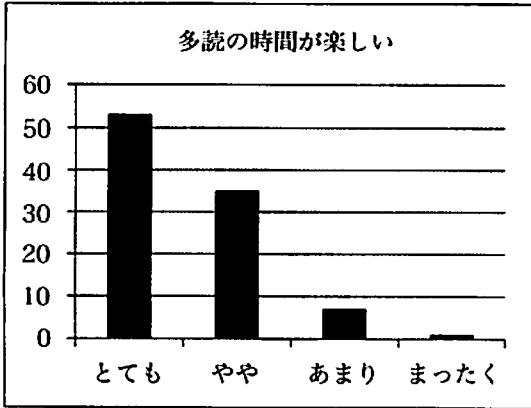
<移動式の書架>



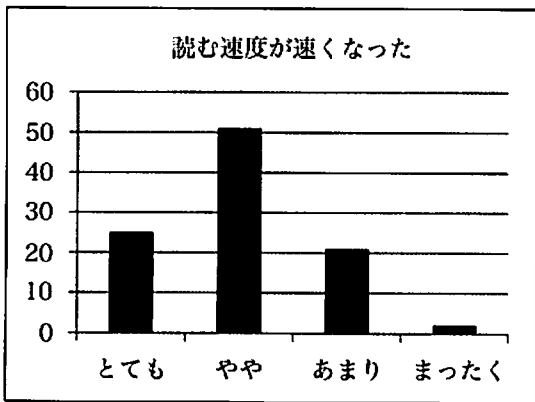
<多読に取り組む3年生>

¹ 酒井邦秀・神田みなみ編著「教室で読む100万語：多読授業のすすめ」大修館、2005

1年間の多読指導を終えて全クラスにアンケート調査を行った。質問項目は10項目で、それぞれの質問に対して①とてもそう思う、②ややそう思う、③あまりそう思わない、④まったくそう思わない、の4件選択法によって回答を求めた。結果は以下のとおりとなった。

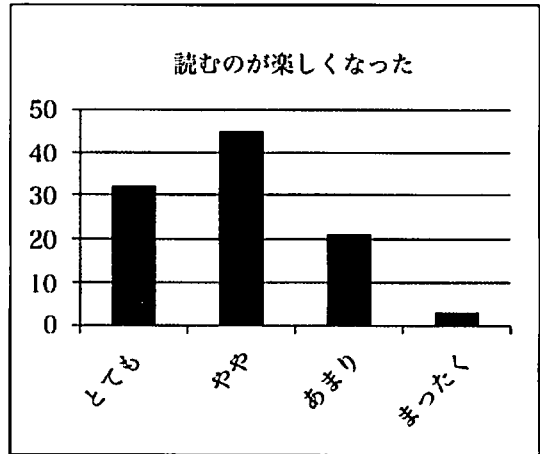


「多読の時間が楽しい」という質問に、「とてもそう思う」とした生徒は56%、「ややそう思う」を加えると91%にも及ぶ。担当した教員によると「はじめはなかなか集中しなかったが、2～3ヶ月経つと集中するようになり、多読を楽しむようになった」ということであった。筆者は多読を開始して半年ぐらい経ったところで授業を参観した。教室は静まりかえり、全員が楽しそうに読書に集中していた。

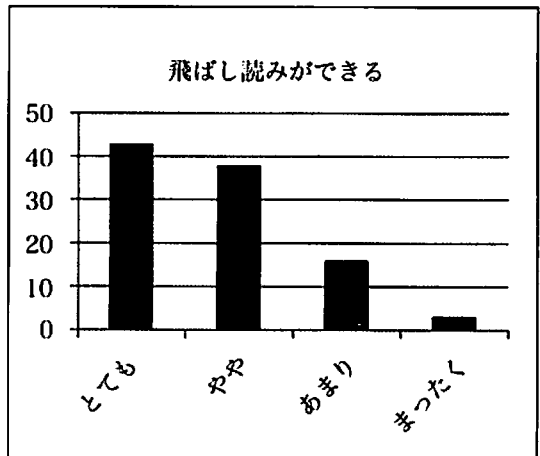


「読む速度が速くなった」という質問に対しては、「とてもそう思う」が25%、「ややそう思う」

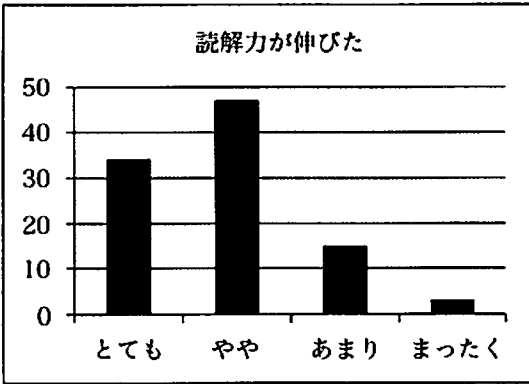
が51%であった。多読指導を続けることにより英語を読むスピードが上がったと感じている生徒が多いことがわかる。



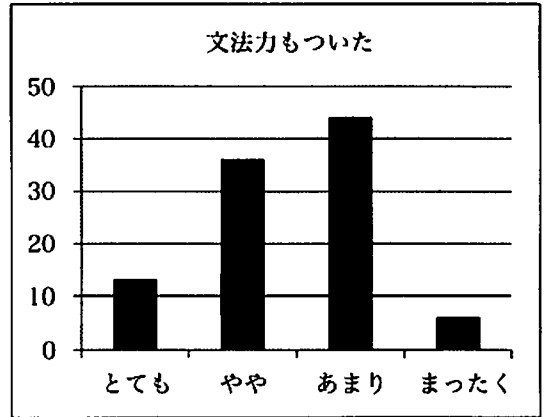
「読むのが楽しくなった」という項目には、「とてもそう思う」が32%、「ややそう思う」が45%となっている。多読を続けることによって英語を読むことが楽しくなったということがわかる。



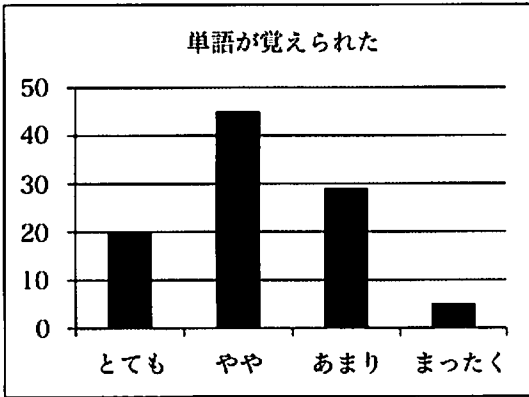
「飛ばし読みができる」という項目には、「とてもそう思う」が43%、「ややそう思う」が38%である。授業の中では、ほとんど体験することのない「飛ばし読み」である。しかし、現実の場面では「飛ばし読み」の技術も求められており、また、読書量を増やすという観点からも必要な技術である。A中学校の生徒が「飛ばし読み」についても、このような結果を出していることは、素晴らしいことだと思う。



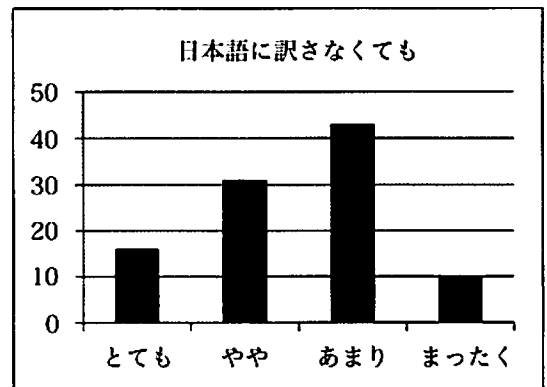
「読解力が伸びた」という項目に対しては、「とてもそう思う」が34%、「そう思う」が47%である。多読によって読解力が伸びたと感じている生徒が多い。



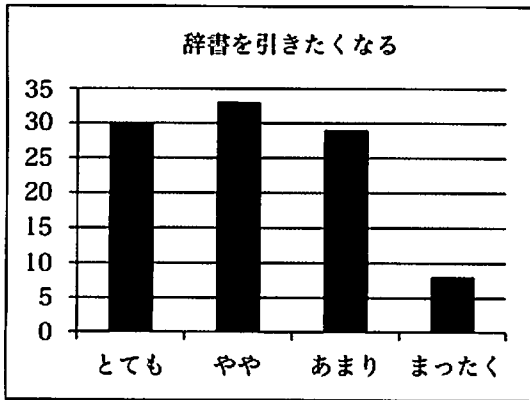
「文法力もついた」という項目には「とてもそう思う」が13%、「ややそう思う」が36%である。「あまりそう思わない」が44%で「まったくそう思わない」を含めると50%となる。教科書を読む時とは異なり、多読は内容に集中して読み進める活動である。むしろ文法を意識せず読み進めることが求められる。しかし、それでも「文法力もついた」と答えている生徒がかなりの割合に上っていることを考えると、文脈を追いながら続ける読書スタイルが、一方では文法の確認になっている可能性があることを示唆するものである。英文を読みながら、「そうか、このような場面で現在完了形を使うんだ」というような気づきが生徒にはあったのではなかろうか。



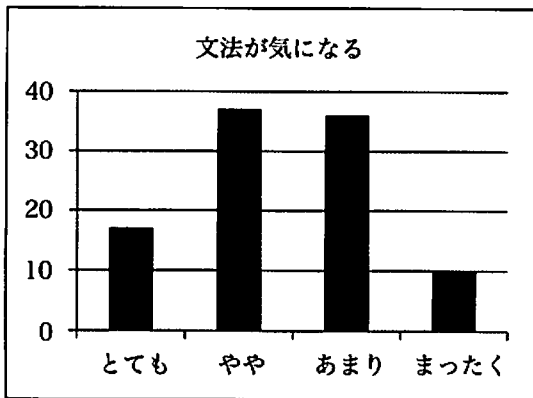
「単語が覚えられた」という項目に対しては、「とてもそう思う」が20%、「ややそう思う」が45%である。多読は単語を覚えることが目的ではないため、この項目が他と比べて低い割合になっていることは当然である。しかし、それよりも、読書（内容）に集中して読み続けることにより、結果的には「単語が覚えられた」という生徒が65%もいることは、今後の単語指導に示唆を与えるものである。単語を文脈から切り離して、何度もノートに書かせて覚えさせる方法よりも、多読を通して、自然に覚えさせるほうが良いのかもしれない。



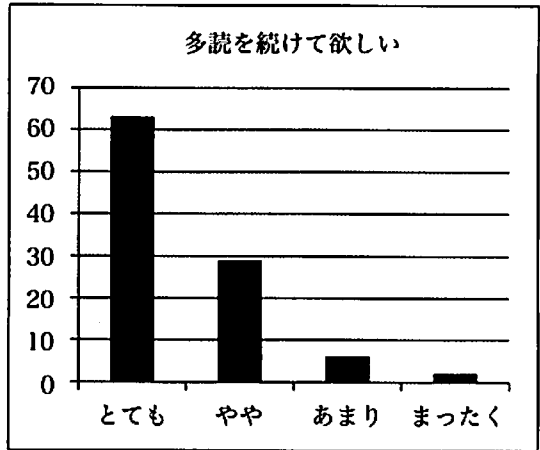
「日本語に訳さなくても理解できる」の項目に対しては「とてもそう思う」が16%で「ややそう思う」が31%である。多読は「いちいち日本語に訳さずに読む」ことが求められるが、その点から言うと、まだまだ「日本語に訳さないとわからない」と感じている生徒が多い。



「辞書を引きたくなる」という項目に対して、「とてもそう思う」は30%、「ややそう思う」は33%となっている。通常の授業なら、「辞書を引く」ことは好ましことである。しかし、多読においては「辞書を引かない」ことが、多読を成功させるカギである。通常の授業での辞書の活用と多読における辞書の使用の違いについて指導する必要があるのかもしれない。



「文法が気になる」という項目に対しては、「とてもそう思う」が17%、「ややそう思う」が37%となっている。「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」を合わせると46%である。若干、「文法が気になる」生徒が多い。これも辞書の場合と同様で、通常の授業においては、文法を意識しながらテキストを読むことが求められている。多読の時だけ「文法を意識するな」と言っても難しいのかもしれない。



「多読を続けて欲しい」という項目に対しては、「とてもそう思う」が63%、「まあそう思う」が29%、合わせると92%に上っている。多読は生徒にも受け入れられている。

V まとめ

A 中学校において、平成 25 年度と平成 26 年度の英語力を英語能力判定テストにより比較した。1 年生の語彙分野を除いて全ての分野と総合点において平成 26 年度が上回っていることが明らかになった。平成 25 年度と平成 26 年度はサンプル数が異なるため、統計的な有意差を確認することはできないが、満点スコアは 460 点であることを考えると、1 年生が 66.4 点、2 年生が 65.5 点、3 年生が 47.4 点という得点の差は、全体的には成績が向上したとは言えそうである。

特筆すべきは平成 26 年度の 3 年生の読解力の向上である。前年度に読解力が落ち込んでいたが、1 年後にはその落ち込みが克服された。それは、3 年生に対して行った多読指導によるものと考えられる。高校受験を考えると、授業は文法指導や語彙指導、そしてドリル型の授業になりがちだが、A 中学校では週 1 回の割合で多読指導に取り組んできた。この多読の実践が生徒の読解力はもちろんのこと、大きく英語力を向上させることに貢献した可能性が高い。今後の授業改善にも大きな示唆を与えるものとなった。

家庭学習とテストの相関については平成 26 年

度も前年度と同様、ほぼ無相関の状況であった。家庭学習が英語力につながるものになっているかどうかはさらに検討が必要である。

本文では触れなかったが、「英語が好きですか」という質問に、平成 26 年度は「とても好き」「好き」を合わせると 1 年生が 70%、2 年生が 73%、3 年生が 63%となっている。前年度の平成 25 年度は、それぞれ 61%、62%、61%であった。筆者らは、英語力の向上を目指して調査研究を行っているが、生徒が英語を嫌いになったのでは元も子もないと考えている。平成 26 年度の調査によってテスト結果も向上したが、英語が好きな生徒も、どちらかというが増えていた。英語を嫌いにさせないことを第一に考えながら本研究をさらに発展させていきたい。

付記：本研究は公益財団法人日本英語検定協会の受託研究（児童英語検定及び英語能力判定テストを利用した児童・生徒の英語力及び態度面に関する研究）及び沖縄県学力向上先進地域育成事業の一環として行ったものである。また、A 中学校には全面的な協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。